

# エーリッヒ・フロムにおける アクティビティの概念

—市民性教育への示唆—

教職開発コース 萩 森 直 子

The Concept of Activity as Discussed by Erich Fromm :  
Implications for Citizenship Education Considered

Naoko HAGINOMORI

Erich Fromm discusses activity as an important concept that has evolved in meaning over time – what used to point solely to actions of significance which *are not* alienated from the self (inner activity) in ancient times now points mainly to actions that are relatively insignificant and *are* alienated from the self (outward activity). This paper examines Fromm's argument in detail and proposes that the possibility of such a dual interpretation of the concept of activity may help to add depth to today's citizenship education efforts which tend to emphasize active citizenship as outward activity in both theory and practice.

## 目 次

はじめに

1. アクティビティの二分類
  - (A) 現代人の病理としてのアクティビティ
  - (B) アクティビティの二分類  
—外面的活動性と内面的能動性の相違—
2. 内面的能動性としてのアクティビティ
  - (A) 動機づけ (motivation)
  - (B) 献身する対象 (object of devotion)
  - (C) 方向づけの枠組み (frame of orientation)
3. 市民性教育への示唆
  - (A) アクティブ・シティズンシップ再考
  - (B) 強化されるべきアクティビティの質とは  
—内面的能動性への現代的要請—

おわりに

はじめに

近年、英語圏のみならず日本の教育界においても、アクティブに係わることの推奨やアクティブな市民を目指す、などの用法において、また主に教育目的および教育目標として、アクティビティという言葉が多用されている。しかし、アクティビティは多義的な言葉である。日本語に訳そうとしてみても、活動や行動そ

のものを指す場合もあれば、活発さ・主体性・積極性・能動性・自発性など、行為の在り方を指す場合もあり、その語法において慎重さを要する言葉の一つとして数えることが可能だろう。概念の意味するところが定まらないまま使用頻度のみが上昇していることを踏まえれば、それは濫用されている、と表現することが可能かもしれない。

そこで本研究では今一度、アクティビティという概念に立ち戻り、それがどのような意味を内包するものかを探ってみたい。その際、参照するのはアクティビティを概念として取りあげ、その意味内容を追究した社会心理学者、エーリッヒ・フロム (Erich Fromm) の議論である。

アクティビティに類似し、また深く関連するアクションという概念を追究した人物としてすぐに思い出されるのはハンナ・アーレント (Hannah Arendt) かもしれない。確かにアーレントは代表作『人間の条件』(The Human Condition, 1958) において、アクション(活動)をレイバー(労働)およびワーク(仕事)と対比させることで、また、特に古代ローマの共和制政治や社会制度に倣う形で、アクションという概念の特徴をその政治的な含意を中心に浮き彫りにしている。アーレントの主張はすでに多くの先行研究によってその議論が検証・援用されており、その議論を知る人も

少なくないだろう。

これに対し、フロムは上述の『人間の条件』より17年も前に出版された代表作『自由からの逃走』(*Escape From Freedom*, 1941)において、そしてその後の著作においてもたびたび、アクティビティという概念に触れている。フロムは特に、動機づけが内在しているか否かという観点から人間のアクティビティにみられる異なる質について言及しており、その特徴を細かく描き出している。にもかかわらず、アーレントとは異なり、フロムのアクティビティに関する議論がこれまで十分に引き上げられ、検証されているとは言い難い。

以上のような経緯を踏まえ、本研究はフロムの論考を参照しながら、アクティビティという概念に内包されるものについて再度検討していく。その上でそれが現代の市民性教育に与える示唆についても考察を加えてみたい。

本論文の構成は次の通りである。まず、フロムにおいてアクティビティ概念を語る上での基礎的な理論枠組みである外面的活動性と内面的能動性についてその概要を確認する。その上で、特に内面的能動性について理解を深めるために、アクティビティ概念と人間の実存性とのかわりについて、および、アクティビティにおける動機づけの存在について把握する。最後に、このアクティビティ概念についての解釈が、現代の市民性教育論に与え得る示唆について考えてみたい。

## 1. アクティビティの二分類

### (A) 現代人の病理としてのアクティビティ

アクティビティについて掘り下げて考える前に、フロムがどのような文脈においてアクティビティについて論じたのかという点に触れておく必要があるだろう。精神分析家であり社会心理学者として知られているフロムは、なぜアクティビティについて考えを巡らせたのか。

ユダヤ系家庭に生まれ育ったフロムは、ナチスの台頭とともにドイツからアメリカへ亡命している。その経験も手伝い、彼は民主主義や人間性に関する考察を多く残している。中でも晩年の主著の一つ、『持つべきか、在るべきか (*To Have or To Be?*)』<sup>1)</sup>では「アクティブであること (Being Active)」および「アクティビティとパシヴィティ (Activity and Passivity)」と題する節が設けられ、ともに詳しく論じられている。

フロムは精神分析および社会心理学の見地も踏まえる形で、民主主義の危機について論じ続けた哲学者でもある。民主主義の機能不全をどう改善し、どう回避するかについて思案し、それを大衆に向かって問いかけ続けたフロムは、民主主義それ自体を前進させることによって民主主義の「自己克服」<sup>2)</sup>を目指した思想家としても捉えられている。現代人の病理の一つとしてアクティビティの欠如を位置づけ、その克服が民主主義の機能回復に繋がることを指摘したフロムは、機能不全に陥ってしまった民主主義の原因分析の一環として、アクティビティについて論じたのである。

以下ではフロムを参照し、そのアクティビティ解釈を紐解いていくわけだが、フロムがそれを論じる上で抱いていた問題意識についても念頭に置きながら議論を進める必要があるといえるだろう。

### (B) アクティビティの二分類

#### —外面的活動性と内面的能動性の相違—

人がアクティブであるとはどのような状態を指すのだろうか。アクティブであることについて論じるに際して、フロムはまず、アクティブ (active) とパッシブ (passive)<sup>3)</sup>は近現代において「最も誤解されている言葉」のうちに入ると指摘している。「これらの言葉が古典古代および中世からルネッサンスに始まる時期までの間に意味していたものと、今日意味するものとは全く違う」<sup>4)</sup>というのだ。

現代的な意味においてアクティビティ (ここではアクティブであることの性質を指すこととする) は通常、「エネルギーの消耗により可視的な効果を生む行動 (behavior) の性質」<sup>5)</sup>を指し、特に社会的な文脈では「社会的に有用な相応の変化に結実する、社会的に承認された意図的な行動」と定義できる<sup>6)</sup>。しかし、この現代的解釈が行動の背後にあるはずの人間の存在には言及せず行動にのみ焦点をあてていることにフロムは批判的な目を向ける。つまり「アクティビティの動機づけが考慮されていない」のである<sup>7)</sup>。人間と行動とが分離されているこのような行動をフロムは人間が「疎外された (alienated)」アクティビティと呼ぶ<sup>8)</sup>。

他方、産業化以前においてアクティビティは、人と行動とが分離されていない、すなわち、人が「疎外されていない (non-alienated)」状態を指していたという。古代アテネでは奴隷ではない限り、「主観的に無意味で、疎外された、純粋にルーチン化された作業」が発生することは稀であり、奴隷ではない者のアクティビティは基本的に生産的で、個人にとって有意味

なものであった、とフロムは説明する<sup>9)</sup>。したがって、そもそもアクティビティとは奴隷にはできない、「個人の感情的、知的、感覚的経験、並びに個人の意志において働く創造的アクティビティの質」<sup>10)</sup>を意味しているのである。中でもこのような疎外されていないアクティビティは「個人が自身の孤立や無力さに駆られる衝動強迫的なアクティビティではなく、また、外から提示されたパターンの無批判的採択であるロボットのアクティビティでもない」<sup>11)</sup>のだという。

フロムはこの疎外されていないアクティビティを「生産的アクティビティ」とも呼んでいる<sup>12)</sup>。ただし、この場合の「生産的」とは新しいものや独自のものを生み出す能力や、アクティビティの結果生まれる物を意味する訳ではない。「生産的アクティビティとは内面的アクティビティの状態を示している」のであり<sup>13)</sup>、内面的にアクティブであることが認められるときにのみ、アクティビティは生産的と呼べるのである。生産的アクティビティを行い、その「結果として得られた特質のみが自己に強さを与え、自己の統合性の基礎を形成する」という条件によれば、「自己は、自己がアクティブである程度と同じ程度において強い」<sup>14)</sup>といえる。換言すれば、生産的アクティビティとは「外的変化がもたらされるか否かにかかわらず、人間に生得的に内在する力 (man's inherent powers) を活用すること」<sup>15)</sup>であり、それは「内面的な強さや自信の結果」<sup>16)</sup>を表すものだという。

では、「人間に生得的に内在する力」とは何か。これは生産的アクティビティの理解のために重要なことである。フロム自身の言葉がこれの意味するところを最も端的に表現している。

人間は平等に生まれるが、人間はまた違う様にも生まれる。この違いの基礎は、人生が始まったときの生理学および精神的両面の生得的な素質にあり、そこへ各人に固有の配列の境遇や、各人が遭遇する経験なども加えられる。この人格の個別的基礎は、二つの有機体が物理的に同一であることがないことと同様に、他のいかなる者とも同一ではない。<sup>17)</sup>

ここで強調されているのは、人がそれぞれ他にはない性格や才能、経験の組み合わせを持つ固有の存在であるということである。そこから導き出されるのは、世の中に同じ人間が一人としていないならば、各個人の特殊性は最大限、活かされるべきである、という主張である。つまりフロムは、人間一人ひとりが生まれ

たときに持ち合わせる個別の生得的な資質が、人生経験が重ねられるとともにさらに異なる方向へと育まれていくことから、人を唯一無二の存在として把握した上で、各々が与えられたものも育まれたものも含め、持てる力を遺憾なく発揮することを生産的アクティビティと呼んでいるのである。

生産的アクティビティに関するこの一連の議論において、一見、フロムは自己の大切さに執着するあまり、社会や他の個人との関係性を軽んじているようにも思える。しかし、生産的アクティビティは孤立を促すものではない。生産的アクティビティは、むしろ「人間が自己の統合性を犠牲にすることなく、孤独という恐怖を克服することができる唯一の道である。なぜなら、人間は自己の自発的 [= 生産的] 実現において世界と一すなわち人間と、自然と、自分自身と一新たに一体となるからである ([ ] 内引用者)」<sup>18)</sup>。つまり、生産的アクティビティによって「孤独という恐怖」を克服することができるため、その結果、人は社会や他の個人と繋がるのがなお一層可能になる、とフロムは説いているのである。この点について、フロムはさらに次のように説明している。「もし個人が自発的 [= 生産的] アクティビティを通して自己を実現し、それにより自身を世界と関連づけたならば、彼は孤立した原子であることを止めるのである。彼と世界とは一つの構造化された全体の一部となる ([ ] 内引用者)」<sup>19)</sup>。恐怖心としての孤独を克服した人間は孤立状態から脱し、社会と、そして他の個人と改めて結びつくことができる、とフロムは主張しているのである。

以上のように、フロムはアクティビティが示す状態を大きく二つに分類している。一方の自己から「疎外された」アクティビティを「外面的アクティビティ (outward activity)」<sup>20)</sup>、他方の自己から「疎外されていない」アクティビティを「内面的アクティビティ (inner activity)」と呼んだ。本稿では、この二つの概念に、それぞれ「外面的活動性」と「内面的能動性」という訳語をあてて<sup>20)</sup>、以降の議論を進めることとする。

ここで改めて二つのアクティビティを整理しておく、外面的活動性は、自己とは切り離された行動を示し、自己が行動の客体となっている場合の行動を指す。これが、現代的解釈としてのアクティビティで、言い換えれば「忙しく在るさま」<sup>21)</sup>である。それに対して内面的能動性は、自己と深く結びつき、自己から湧き出る行動で、特に自己が行動の主体になっている様子を指す。この場合の行動は、「人間に生得的に内在

する力」<sup>22)</sup>の「生産的活用」<sup>23)</sup>であることが条件で、それが充たされていれば必ずしも可視的な活動が伴う必要はない。したがって外面的活動性と内面的能動性の違いは、ある行動が、人間として活用すべき内在的な力を活用するものか否か—活用するものならば内面的能動性に区分され、そうでなければ外面的活動性に区分される—という点にあるといえる。

## 2. 内面的能動性としてのアクティビティ

理想的社会の実現のためには「すべての人間が、その経済における機能において、また、市民として『内面的能動性の意味において』アクティブ』に参加すること（〔 〕内引用者）」<sup>24)</sup>が必要だとフロムは説いている。この解釈に基づいてアクティビティ概念を捉えるならば、外面的活動性の側面においてのみアクティビティを捉えている現代において重要なのは、内面的能動性としてのアクティビティを再評価することであろう。以下ではこの内面的能動性の特徴について詳述していく。

フロムによれば内面的能動性を外面的活動性と区別する際に重要なのは動機づけの存在であるという。そしてこの動機づけの形成に特に重要とされるのが、動機づけの在り方を決める献身の対象、および、献身の対象を決定するための基盤となる方向づけの枠組みの設定、の二つである<sup>25)</sup>。ここでは内面的能動性における動機づけの重要性をその構成要素に着目しながら詳しく検討することにする。

### (A) 動機づけ (motivation)

内面的能動性に重要なのは動機づけ (motivation) である。フロムは外面的活動性の特徴を「行動の背後にいる人間には言及せず、行動にのみ焦点をあてている」<sup>26)</sup>と捉えていた。行動のみに目が向けられることで、その「背後にいる人間」の内部において何が行動の原動力となっているのか、そもそも行動の原動力が存在するのか否かについて問題にされることはない。フロムにとっては行動の基となる「動機づけが考慮されていない」<sup>27)</sup>ことが外面的活動性の最大の問題なのである。この問題を克服するものとして内面的能動性に求められるのは、外面的活動性において欠如している動機づけの考慮を補うことであろう。敷衍すれば、可視的な行動がなされることをひたすらに歓迎し賞賛するのではなく、行動の裏に存在する動機づけに留意することが決定的に重要なのである。

### (B) 献身する対象 (object of devotion)

動機づけはしかしそれ単体で在るものではない。「行動の背後にいる人間」が何かに向けて献身的であること (object of devotion)<sup>28)</sup>がそれを下から支えているのである。前述のように内面的能動性には動機づけの存在を考慮することが不可欠である。その動機づけの在り方を決定づけるのが献身する対象を持つことだとフロムは主張する。「何に対して献身的であるかが、行動を動機づけるのである」<sup>29)</sup>。フロムはこう端的に説明しているが、言葉を補うならば、心が何か特定の方向を向いている（何かに向けて献身的である）ということは、漠然とであれ、向かうべく実存的な目標なるものが存在するということでもある。フロムはそのような「我々のエネルギーを一つの方向に統合し…孤立した存在であることを超越させ、生きることの意味を問う声に応える」<sup>30)</sup>ような目標があつてこそ、有意義な行動へとつながる動機づけが形成される、と指摘しているのではないだろうか。内面的能動性においては、動機づけの源泉となる献身の心を持つことはもちろん、その献身が何に向けられているかもまた重要になってくる。

### (C) 方向づけの枠組み (frame of orientation)

さらに留意すべきなのはどのような方向づけの枠組み (frame of orientation)<sup>31)</sup>を持つか、すなわち、自己および世界の在り方のどのような理解に基づき、自らを世界に対してどのように位置づけ、方向づけていくか、である。内面的能動性に欠かせない動機づけを考慮する上では前述のように動機づけの在り方を献身の観点から検討するのに加えて、動機づけの形成過程を検討する必要がある。動機づけの在り方が献身の心およびその対象によって決定づけられるならば、その献身の心を決定づけるものは何か。それは自己の方向づけの枠組み、すなわち、「私たちの自然のおよび社会的世界の地図」、いいかえれば「世界、並びに世界における自己の位置を表す、系統立てられ、内的統合性を持った絵」<sup>32)</sup>である。何に献身するかという意味決定は自身が自己の周りを、自己の世界観をどのように把握するかによって依拠しているからである。

なお、フロムは動機づけの在り方を決定づける献身の対象を人道主義に置いている。人道主義を献身の対象として選定する理由を次のように述べる。人間の一生の短さは、所与の潜在能力の全てを実現させることを不可能とするが<sup>33)</sup>、その一方で、「人間は、彼自身への責務を引き受けなければならない」<sup>34)</sup>。過去およ

び未来世代からの語りかけ<sup>35)</sup>に応えるためにも、フロムは人道主義を自らの献身の対象として選択している。

以上、フロムのアクティビティ議論における内面的能動性の重要な要素である動機づけ、およびその構成要素について確認した。それらは、動機づけの存在、選択された献身の対象、そしてその基盤となる方向づけの枠組みである。敷衍すれば、外面的活動性が単に「忙しく在るさま」を指すのに対し、内面的能動性においては、個人において、ある特定の自己の方向づけの枠組みに基づいて設定された献身の対象が基礎となって動機づけが形成され、その動機づけが原動力となって行動へと繋がっているのである。

行動を下支えするもの、あるいは行動の背景として、動機づけ、献身の対象、および、方向づけの枠組みを持っているということが内面的能動性の主だった特徴であった。ここで、先述した外面的活動性と内面的能動性の違いを改めて思い起こしてみると、その違いは、それが自己と深く結びついた行動か否か、自己が行動の主体となっているか否か、人間として活用すべき内在的な力を活用するものか否か、などの点に集約される。

フロムはこのアクティビティについての議論を通して繰り返し、人間の個々の生の唯一性に言及している。人は各自に内在する力を発揮すべきである、という主張は、人間の生についてのこの捉え方が立脚点になっていると言えるだろう。フロムは、生の唯一性に気づき、自己に内在する力を発揮すること、すなわち生産的アクティビティに従事することで、人と世界は「ひとつの構造化された全体の一部となる」<sup>36)</sup>ことが可能になるとしている。自己と世界をひとつの全体として捉えることが可能になるということは、自己の存在の固有性に気づくことと同時に、自己の存在の相対性に気づくことに、つまり、自分が人間存在全体の中においてはほんの小さな、一過性の点のような存在であることへの気づきを意味しているのではないだろうか。

これらの見地を総合すると、内面的能動性としてのアクティビティは、方向づけの枠組みに沿って設定された献身の対象によって内在的に動機づけられながら、自らの持てる力、ないしは世の中から自分の独自性として発揮することが期待されていると思われる力を遺憾なく発揮し、その結果、自分と世界との関係性についての理解が更新され、その新しい理解に基づいて修正された世の中の捉え方および方向づけの枠組み

に沿って、また自らに内在する力を発揮していくこと、という連続した営みとして捉えられるのではないだろうか。

### 3. 市民性教育への示唆

#### (A) アクティブ・シティズンシップ再考

アクティブ・シティズンシップは1990年代以降、多くの国や地域において教育目標の表現として採用されてきた。しかし、アクティブ・シティズンシップというと聞こえはよいものの、それが具体的にはどのような市民を指すのかについては詳細な検討がされないままとなっている。ではフロムのアクティビティ概念の理解は、アクティブ・シティズンシップの理解をどう助けるものになるだろうか。市民がアクティブである、ということが内包する意味について少し考えてみたい。

アクティブ・シティズンシップという概念の教育目標としての妥当性を検証した先行研究には、たとえばキムリッカとノーマン (Kymlicka and Norman, 1994)、ホワイト (White, 1996)、エンスリンとホワイト (Enslin and White, 2003)、蓮見 (2004) などがある<sup>37)</sup>。しかし、これらはいずれもアクティブ・シティズンシップを望ましい市民像あるいは教育目標として掲げることは必ずしも適切ではない、ということを論じることに力点を置いている。しかし、アクティブ・シティズンシップが現実には教育目標としてすでに掲げられているならば、対応の方法として、その不適切さを指摘するのも一つだが、もう一つの方法として、そして今必要とされているのは、アクティブ・シティズンシップという教育目標をより豊かなものとして描き出すことではないだろうか。本節ではアクティブ・シティズンシップが意味し得るものについてフロムに基づいて再検討することで、それを肯定可能な教育目標として捉え直すことを試みる。

フロムの分析は、アクティビティの捉え方が一つではないということを理論的な観点から教えるものであった。アクティビティの捉え方が二つ存在することは市民性教育論にどのような示唆を与えるのだろうか。それは、教育目標としてのアクティブ・シティズンシップの捉え方にも二つあって然るべきということであろう。

その二つの捉え方とは何か。一つは外面的活動性を確保する市民の在り方である<sup>38)</sup>。これは、たとえば投票活動や、署名やデモなどの抗議活動、募金やボラン

ティアなどの援助活動など、市民として万人に可視的な形で行動することを指す。ただし、これらの行動を個人が実存的な関心の下に行っているのか、それを行うことが義務または権利であるから行っているのか、または何も関心はないが、ただ他から非難されないために行っているのか、など動機づけの有無については問題視しないのが外面的活動性の特徴である。外面的活動性としてアクティブ・シティズンシップを捉える解釈では市民の活動それ自体が重んじられる。

もう一つは内面的能動性を確保する市民の在り方である。この場合、自らが疎外されない形で市民として内面的能動性を発揮することをアクティブ・シティズンシップと捉える。すなわち、可視的であるか否かに拘らず、その行動が自らに有意味な形で、換言すれば、自己の実存的関心にそった形で、自分が生きていることとの深い関係性において行われることが鍵となるのである。

では、この二つのアクティブ・シティズンシップの解釈から推進される市民性にはどのような危険性が潜んでいるだろうか。

外面的活動性の観点からアクティブ・シティズンシップを定義した場合、市民に期待されるのは活動である。活動であれば、それが内面的能動性のように自らにとって有意味なものではなくとも、つまり市民自身からは完全に疎外された行動であっても推進されることとなる。行動とは違うことを内心考えていても、または何も考えていなくても、行動さえすれば、そして行動することこそが市民的であると見なされてしまう危険性がある。

他方、内面的能動性の観点からアクティブ・シティズンシップを定義した場合、市民は内面的能動性を発揮してさえいればよいことになる。自らの実存的関心は公に表明する必要がないため、それを不参加の隠れ蓑として悪用する者があらわれることも考えられる。また、投票などをはじめとする自己の外面における活動は誰も行う必要はない、という極論が出てきても不思議ではない状況になってしまう。

市民性にあてはめてみると、なぜこのような危険性が生まれるようになるのか。それは、フロムがアクティビティについて考えた際に求めていたのは現実社会において達成可能なものとしてのアクティビティ概念の理解ではなく、あくまで理想論として描き出された社会における人の生き方について、規範的に検討しようとしたものであり、それを現代社会において実際に応用しようとすると様々なほころびが生じてくるか

らである。フロムがアクティビティの解釈として外面的活動性と内面的能動性を提出したのは、外面的活動性だけに焦点をあてた生活のかわりに、すなわちそれに代替するものとして内面的能動性を重視する生活を推奨するという意図のもと、その違いを描き出すためであった。しかし、市民性の議論においてはこれとは違った結論が導き出される。

すなわち、市民性においては、外面的活動性のみに偏ることも、内面的能動性のみに頼ることも、回避されなければならないのである。動機づけの有無やその質にかかわらず、行動をすることだけが市民的だとし、て賞賛されるような状況は避けられなければならない。一方、自らの実存的な関心に適っているからといって、沈思しているのみで一向に行動に表れることのない内面的能動性のみを重要視する市民で溢れかえる状況もまた回避される必要がある。

フロムのアクティビティ議論における陥穽はここにある。外面的活動性を内面的能動性で置き換えるべき、という主張は理解可能なものの、実際に置き換えることを想像してみると、果たしてどれくらいの人々が、フロムが要求するような内面的能動性のレベルにまで到達し、自分の人生を生きようになれるだろうか。ほとんどの場合、そのようなレベルにまでは達しないのではないだろうか。そう考えてみると、内面的能動性のみに偏重するのは現実問題としては推奨されない、という結論になる。また、内面的能動性のみが極端に重視されるようになると、外面的な活動のひとつひとつが軽視される、あるいは、そこに内在的な関心が存在するか否かについて警戒し、懐疑的になるという可能性も考えられる。このように、現実社会において実際に活動する者としての市民については、フロムの規範理論とは異なり、外面的活動性と内面的能動性の双方をとにも獲得し、発揮することが重要なのである。

したがって、外面的活動性と内面的能動性をアクティブ・シティズンシップの両輪と呼ぶことにしたい。外面的活動性と内面的能動性の双方が揃ったとき、すなわち、内面的能動性と外面的活動性がともに発揮されるとき、あるいは外面的活動性も内面的能動性もおおそかにされない形で市民的活動が実践されるとき、はじめて本当の意味でのアクティブ・シティズンシップの実現に繋がるといえるのである。

## (B) 強化されるべきアクティビティの質とは

### —内面的能動性への現代的要請—

これまで、アクティブ・シティズンシップは主に三つの文脈において要請されてきた。詳細は別の機会に譲ることとするが、その三つとは、投票率が低迷し政治的無関心が蔓延する中で政治参加を促進するため、多文化社会において国民意識がバラバラになってしまわぬよう国民的連帯感の醸成のため、および、国家への過剰な依存を断つという脱福祉国家のレトリックのため、である。

同時に、これらアクティブ・シティズンシップを要求する議論に加えて、これらの論者に対する批判も存在する。たとえば、上のような議論の中で推進されている市民性が公的領域における男性的な行動に限定する形で言及している、というフェミニズムの観点からの批判<sup>39)</sup>や、よき市民は必ずしもアクティブである必要はない、ということを論理的に証明してみせた論者<sup>40)</sup>もある。

アクティビティの再考を経て、改めて蓄積されてきたアクティブ・シティズンシップに関する諸議論を検討してみると、ある共通した傾向に気付く。それは、アクティブ・シティズンシップを推奨する議論も批判する議論も、どちらも外面的活動性としてのアクティブ・シティズンシップを前提に議論を進めている、という点である。

たとえば、アクティブ・シティズンシップ推奨派の議論については、政治参加の促進を目的とするアクティブ・シティズンシップの要請も、国家的連帯感の醸成を目的とするアクティブ・シティズンシップの要請も、市民に特定の行為や行動様式を求めるものでありながら、アクティビティの過程ではなく結果が重視されている<sup>41)</sup>。その上、「アクティビティの動機づけが考慮されていない」<sup>42)</sup>。翻って新保守主義政策を擁護するために要請されたアクティブ・シティズンシップは、あくまで国家財政への負荷を軽減するための措置であり、国への福祉面での依存を断つことを求めるものであるため、最終的で可視的な結果としての行動のみ、つまり、個人の経済的自立のみが要請されているといえる。

しかし、前節の終わりに示したように、外面的活動性と内面的能動性の双方をアクティブ・シティズンシップの資質と捉えるならば、アクティブ・シティズンシップ批判論についても次のように整理することができる。たとえば、先に示したフェミニズムの観点からの批判は、これまでの議論が特に公的領域における

男性的な活動に固執したものであることに異論を唱えるものであった。しかし、アクティビティの意味を外面的活動性と内面的能動性の双方を含むよう捉え直すことは、アクティビティの質そのものを幅広く捉えることにもつながる。加えて、内面的能動性が「人間に生得的に内在する力」を発揮することを指すのであれば、それは公的領域においてのみ発揮されるものでは決していない。その意味でアクティブ・シティズンシップは公的領域におけるアクティビティに限定されないものとして解釈することが可能となる。つまり、アクティブ・シティズンにおけるアクティビティは公的領域における男性的な活動(＝外面的活動性)に固執している、という指摘を修正し、公的および私的領域において、外面的活動性および内面的能動性をともに発揮している市民像へと転換することが可能になるのである。

また、市民は必ずしもアクティブである必要はない、という批判に対しても次のような応答が可能になる。つまり、この批判が異議を唱えているのも、フェミニズム的視点からの批判と同様、アクティビティを外面的活動性として捉えている現状に対してであると捉えることができるのである。もしアクティビティが外面的活動性のみを指すのであれば、市民には公的な議論に恒常的に参加することが求められることになる。しかし、アクティビティが内面的能動性をも含意すると捉えるならば、物理的な参加行為のみが賞賛されるのではなく、たとえば公的な議論に参加はしなくともその議論について一人で深く考えることもまたアクティビティに含められることになろう。そしてそれは近代以降、「刺激と反応の間にあるはずの思考というプロセスが欠けてしまっている」と評される現代社会において、十分市民的な活動の一部分として捉えることが可能だろう。あるいは、これはアクティブ・シティズンシップの両輪を携えた市民として成長しようとする過程にある人においては特に認められるべき行動だといえる。

以上のようにアクティビティの意味をフロムに依拠して捉え直したことにより、これらの批判がいずれも内面的能動性の欠如状態に対する異議であったことがわかる。これらの批判を乗り越えた先にあるシティズンシップとは、そのアクティビティの意味合いに内面的能動性が補完されたアクティブ・シティズンシップである。つまり、現代において求められているのは、アクティブ・シティズンシップ論における内面的能動性に関する側面を積極的に再評価していくことであら

う。

## おわりに

以上、フロムに依拠してアクティビティの意味を再検討し、それが市民性教育論に与え得る示唆について考えてきた。アクティビティに外面的活動性と内面的能動性という二つの解釈の存在が示されたことは、現代の市民性教育における目標の一つであるアクティブ・シティズンシップが内包する教育内容の広さを認識させるものであった。

同様に、外面的活動性と内面的能動性というアクティビティの二つの解釈が提示されたことは、市民性教育実践を検討する際の新たな分析軸を提出することにも繋がる。これまでの市民性教育論では、教育実践を分類する際、たとえばウエストハイマーとカーネ（Westheimer and Kahne, 2004）が個人義務型、参加型、正義志向型という三つの市民像を掲げたように、いくつかの市民像を挙げた上で、内容や方向性を比較したいと思う教育実践をそのいずれかにあてはめることで分析する<sup>43)</sup>、という方法が用いられてきた。しかし本研究により、先の例のように市民像をもちいた従来の分析軸ではなく、外面的活動性と内面的能動性という視点から教育実践の内容を検討することが可能となった。言い換えれば、これは既存の市民性教育実践、たとえばサービス・ラーニング<sup>44)</sup>などについて、外面的活動性や内面的能動性に即した新たな意味づけを可能にするものといえる。

これまでの研究が論証しているように、市民にアクティビティを求めることはそれ自体に価値があるものではない。しかし、本稿が示したように、市民のアクティビティを外面的活動性と内面的能動性という二つの側面を包摂した概念として把握するならば、それは市民に求められるアクティビティというものを複眼的に（すなわち立体的に、そして自己相対化する形で）捉えることを可能にするのではないだろうか。このような視座からアクティブ・シティズンを概念として捉え直すことはまた、市民性教育内容における重心が外面的活動性の育成に偏らないよう、既存のカリキュラムを再考する必要性を要請するものともいえる。この点については、内面的能動性を育むための具体的な教育内容の思案とともに今後の課題としたい。

（指導教員 佐藤 学教授）

## 注

- 1) なお、訳書の題目は『生きるということ』であるが、直訳の方が著作の意図および内容を伝えられると判断し、ここでは原題を直訳して紹介している。
- 2) 岡崎晴輝 2007『フロム「自由からの逃走」を読む』九州大学政治哲学リサーチコア編『名著から探るグローバル化時代の市民像—九州大学公開講座講義録—』（比較社会文化叢書Ⅳ）花書院、p. 169.
- 3) ここでの *passive* は *active* の対極として受動性・消極性などを意味しているが、アクティビティ概念の検討に差し障りのないよう、あえて訳出せずにカタカナでの表記とする。
- 4) Fromm, E. *To Have Or To Be?* New York : Continuum, 2010 [1976], p. 73.
- 5) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 73.
- 6) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 73.
- 7) Fromm, E. *The Art of Loving*. New York : Harper and Row, 1956, p. 17. これに加えて、現代においてはアクティビティの過程ではなく結果が強調されている点についても批判的な見解を示している。（Fromm, *op. cit.*, 1969 [1941], p. 262.）
- 8) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 74.
- 9) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 75.
- 10) Fromm, E. *Escape from Freedom*. New York : Henry Holt and Company, 1969 [1941], p. 258.
- 11) Fromm, *op. cit.*, 1969 [1941], p. 258.
- 12) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 74. なお、このページの脚注においてフロムは、生産的アクティビティという呼び方について、『自由からの逃走』においては自発的アクティビティ（*spontaneous activity*）と呼んでいるものを、後の書物においては生産的アクティビティ（*productive activity*）と呼んでいる旨、断っている。
- 13) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 74–75.
- 14) Fromm, *op. cit.*, 1969 [1941], p. 261–262.
- 15) Fromm, *op. cit.*, 1956, p. 18.
- 16) Fromm, *op. cit.*, 1969 [1941], p. 91.
- 17) Fromm, *op. cit.*, 1969 [1941], pp. 263–264.
- 18) Fromm, *op. cit.*, 1969 [1941], pp. 260–261. 註12参照。
- 19) Fromm, *op. cit.*, 1969 [1941], pp. 262–263. 註12参照。
- 20) なお、訳者の佐野哲郎はこれらをそれぞれ「外面的能動性」と「内面的能動性」と訳している（エーリッヒ・フロム（佐野哲郎訳）『生きるということ』紀伊国屋書店、1977, p. 126）。しかし、能動性という日本語の持つ内面性への含みを考慮すると、岡崎がそうしたように、*activity* という同じ一つの単語の訳であってもそれを活動性と能動性とに訳し分けた方が日本語として、その意味の違いが伝わりやすいだろう。一方、*outward* と *inner* について、岡崎は外的と内的とに訳し直しているが、活動性としてのアクティビティの表層的な特性への示唆や、能動性としてのアクティビティの人の精神面への言及を考えれば、佐野の外面的と内面的という訳の方が適切に思われる。以上のような理由により、ここでは岡崎の *activity* の訳し分けと、佐野の *outward* と *inner* の訳し分けをそれぞれ採用し、フロムのアクティビティの二分類を外面的活動性と内面的能動性とする（岡崎晴輝『与えあいのデモクラシー—ホネットからフロムへ—』勁草書房、2004, p. 149）。



- 21) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 72.
- 22) Fromm, *op. cit.*, 1956, p. 18.
- 23) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 72.
- 24) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 147. 註12参照。
- 25) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], pp. 110-113.
- 26) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 73.
- 27) Fromm, *op. cit.*, 1956, p. 17.
- 28) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976] p. 112.
- 29) *Ibid.*, p. 111.
- 30) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 113.
- 31) *Ibid.*, p. 112.
- 32) *Ibid.*, p. 112.
- 33) Fromm, E. *Man for Himself: An Inquiry into the Psychology of Ethics*. New York: Rinehart and Company, 1947, p. 42.
- 34) *Ibid.*, p. 45.
- 35) Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 133; Fromm, *op. cit.*, 1947, p. 43.
- 36) Fromm, *op. cit.*, 1969 [1941], pp. 262-263.
- 37) 教育論ではないため、教育目的としての妥当性の検証はされていないが、イギリスにおけるアクティブ・シティズンシップ理念の展開を詳細に追ったものとして、平石耕2009「現代英国における『能動的シティズンシップ』の理念—D. G. グリーンと B. クリックを中心として」政治思想研究 (第9号) も参照。
- 38) なお、フロムは外面的活動性を、「究極の倫理的精神的要求に根ざしそれを表現するもの」(Fromm, *op. cit.*, 2010 [1976], p. 76) ではないことを理由に拒否しているが、外面的活動性には外面的活動性の利点がある。それは、人から疎外された行動であるからこそ、比較的容易にその実現が可能であり、したがって、市民がそれぞれ様々な事情を抱える中で、いわば片手間であったとしても多数が行動することを期待できる点である。加えて、現代においては本当の意味においての内的能動性はほぼ経験されないという事情もあるため (*Ibid.*, p. 75), ここでは外面的活動性を捨象せずに内的能動性と並列に扱うこととする。
- 39) たとえば, Arnot, M., Araujo, H., Deliyanni-Kouimtzis, K., Iverson, G., and Tome, A. 2000 “‘The Good Citizen’: Cultural Understandings of Citizenship and Gender Amongst a New Generation of Teachers.” in Leicester, M., Modgil, C., and Modgil, S. (eds.), *Moral Education and Pluralism (Education, Culture and Values, Vol. 4)*. London: Falmer Press. などを参照。
- 40) たとえば, 蓮見二郎 2004「英国公民教育の市民像としての活動的公民格—教育目標としての『アクティブ・シティズンシップ』の政治哲学的分析—」『公民教育研究』(12), 日本公民教育学会などを参照。
- 41) Fromm, *op. cit.*, 1969 [1941], p. 262.
- 42) Fromm, *op. cit.*, 1956, p. 17.
- 43) Westheimer, J. and Kahne, J. 2004 “What Kind Of Citizen? The Politics of Educating for Democracy” *American Educational Research Journal* (41) (2).
- 44) コミュニティ・サービスの発展型とされ、市民性教育の一環として捉えられることも多いサービス・ラーニングについては唐木清志 1998「『サービス学習』における『統合』と『振り返り』の視点—ウェイズカ・ミドル・スクール『クリスマス・カール』の分析を通して—」『公民教育研究』(6), 日本公民教育学会など

を参照。

## 参考文献

- 関根宏朗 2008「エーリッヒ・フロムの思想における「ケア」概念の重層的性質—ケア論に対するフェミニズムからの批判を乗り越えるために」教育哲学研究 (98).
- 関根宏朗 2009「エーリッヒ・フロム「自己実現」論の再構成：「持つこと」と「在ること」の連関に注目して」教育学研究 (76) (3).
- 田中每実 2010「教育現実の構成と教育哲学の構成」教育哲学研究 (101).
- Enslin, P., and White, P. 2003 “Democratic Citizenship” in Blake, N., Smeyers, P., Smith, R., and Standish, P. (eds.) *The Blackwell Guide to the Philosophy of Education*. Oxford: Blackwell.
- Jochum, V., Pratten, B., and Wilding, K. 2005 “Civil Renewal and Active Citizenship: A Guide to the Debate” Report prepared for the National Council for Voluntary Organizations, London: National Council for Voluntary Organizations.
- Kymlicka, W., and Norman, W. 1994 “Return of the Citizen: A Survey of Recent Work on Citizenship Theory” *Ethics* (104).
- White, P. *Civic Virtues and Public Schooling: Educating Citizens for a Democratic Society*. New York: Teachers College Press, 1996.